

日本語の感情表現に対する 韓国人日本語学習者の認知実態

－「嫌」の感情表現を中心として－

宋 誓 天*

(e-mail : sseuchen@naver.com)

目 次

1. はじめに
 2. 先行研究
 3. 研究概要
 4. 「嫌」の感情分類と分析結果
 4. 1 不満／不機嫌
 4. 2 軽蔑
 4. 3 憎しみ
 4. 4 恥ずかしさ／気まずさ
 4. 5 面目／体面
 5. アンケート調査と分析結果
 5. 1 両国語の固有表現に対するJとKの認知調査
 5. 2 日本語の固有表現に対するk aとk bの認知調査
 6. まとめ
-
-

1. はじめに

人間の感情は身体語彙を用いて表現されるものが多い。特に日韓両国語は、同じ漢字文化圏という社会的・文化的な通念が類似していることで、同じ語彙の構成句で成り立っている感情表現が多いと思われる傾向がある。それでは次の例を見てみよう。例文の括弧

* 江陵原州大学校 日本学科講師 日本語学・日本語教育

は傍線部分の感情を表す慣用表現を日本語で直訳したものである。

- (1) ① 危篤という電報から差し引いて考える奴もないものだと思った。殊に赤児を東京へ連れて行きたがった祖母に対しては腹が立った。(和 157)
- ② 입에 거품을 물고 대들다. (口に泡を含む)
- ③ If you ask me once more if I've read any good books lately I'm going to eatmyhead. (頭を食う: 김순미 113)

上記の例(1)は、身体語彙を用いている表現上の共通点や類似している言語文化であるとしても、それぞれの慣用表現が表している感情の状態は見当が付きにくい。特に「腹が立つ」という慣用表現の構成句を説明し、それらの全体の意味が‘怒’の感情の慣用表現であると説明を付け加えても、互い異なる言語文化の中では、何故それらが‘怒’の感情の慣用表現になるのかという疑問は残るだろう。しかし日本の‘腹の文化’に対する理解ができるならば「腹が立つ」という慣用表現について、明快な説明はできなくても少なくとも「腹が立つ」の慣用表現が‘怒り’の意味になるということの説明になるはずである。

Kovecses(1995)¹⁾は「①文化が違うと感情語も異なる」と「②文化の違いに感情語は左右されない」という相反する2つの予測について「感情の概念化とその表現を決定しているのは文化的歴史か、それとも生理的か」について考察し「怒りの概念には文化と生理の双方が影響している」と結論付けている。

そこで本稿では、日韓両国語の感情表現を対照分析した上で、日本語の感情表現に対する韓国人日本語学習者の認知実態を明らかにすることを目的とする。さらに両国の言語文化間に存在する相違点や類似点についても考察する。

2. 先行研究

ここでは、身体語彙の研究を含めて従来の研究を検討してみよう。身体部位の分類し方は学者によって若干違いがある。和田節(1969)²⁾は「髪・頭・額・目・歯・骨」などの直接に目に見える部位の語彙の他にも「涙・あせ・唾・尿・息」などのような身体からの出るものを対象とし、六五項目に及ぶ身体語彙を取り上げている。

1) Kovecses, Z. 1995. Metaphor and folk understanding of anger. In Taylor, J. & R. e. Maclaury, ds. Language and the cognitive construal of the world. Berlin: Mouton de Gruyter, p.195

2) 和田節 (1969) 「からだことば考」『思想の科学』94 思想の科学社 pp.82-94

星野命 (1976) 3)は、身体そのものを指すもの以外にも、身体部位ではないが、それから派生した「力・熱・痛み・血・涙・唾・息」などの 感覚や分泌物、さらには「気」を用いた表現の一部分などの精神的作用にまでを身体語彙に加えている。

また「身体語彙」を広義の語彙に取って、身体内外の以外に精神的なものも含めているのは石田博史 (1989) 4)がある。石田博史は「魂・意・情け」などの抽象的で精神的なものを含めて例を挙げ、「身体語彙」を広義の語彙で捉えている。

林八龍 (2002) 5)は身体語彙の範囲を大きく「身体そのものを対象とする場合」と「身体から起因する諸現象や作用を対象とする場合」に分け、それぞれ一次的なものと二次的なものに詳しく分類して特徴を詳しく説明している。先ず、身体そのものを対象とする場合を一次的なものと二次的なものに分ける。一次的なものとは、もっとも基本的な身体部位から成立しているもので、部分として捉えるものは「頭部・胴体部・四肢部」に、全体として捉えるものは「全身部」にし、大きく4つに分ける。

- ① 頭部：頭・顔・髪・つむじ・額・眉・目・頬・耳・鼻・口・唇・舌・歯・顎・ひげ・首
- ② 胴体部：胸・心臓・肺腑・肝・胃・腸・腹・腰・背
- ③ 四肢部：肩・腕・肘・手・指・爪・掌・尻・足・膝・股・すね・きびす
- ④ 全身部：身・血・骨

これに対して二次的なものとは「こぶ・ほくろ・しこり・しわ」などのように、必ずしも一定した身体部位とは言い難い性格のものであると説いている。

一方、身体から起因する諸現象や作用を対象とする場合は、大きく「直接的・具体的なもの」と「間接的・抽象的なもの」とに分けて考えている。「直接的・具体的なもの」とは、いわゆる身体による間接的な分泌物、または、排泄物として捉えられる性格のもので、「涙・汗・唾・垢」などがある。なお「間接的・抽象的なもの」とは、「念・魂・意・気・心」などのように人間の精神ともっとも深いかわりあいを持つものである。

寺澤芳雄他 (1997) 6)は、日・英感情語彙分類対照表「第一部 (1997) : 英語における身体語彙感情表現、第二部 (1999) : 日本語における身体語彙感情表現」を作成して、両言語を同じ感情分類の枠組みの中で感情ラベルを付け、感情表現の分布を明らかにし、感情別に用いられる身体部位を意味・構文の観点から慣用句のタイプを

3) 星野命 (1976) 「身体語彙による表現」『日本語講座 第四巻 日本語の語彙と表現』大修館 pp.155-156

4) 石田博史 (1989) 「身体語彙に関する慣用表現」『言語』18 大修館 p.31

5) 林八龍 (2002) 『日・韓国語の慣用的表現の対照研究』明治書院 p.153-155 をもとにして作成。

6) 寺澤芳雄他 (1997) 「総合研究11 日・英慣用表現の対象研究」『東京女子大学比較文化研究所紀要』第58巻 東京女子大学比較文化研究所

類別した。

認知言語学の観点からの研究は現在活発に行われているが、特に馬場典子（2001）は「怒りの直接表出表現」の意味特徴と照らし合わせ、また馬場典子（2002）⁷⁾では「腹が立つ」の分析可能性を示すことを主眼としている。そこで「腹」を「精神的研鑽を積んだ内的自己」が宿る場所と捉えるような考えが「動機付け」となり、この「腹」と「立つ」の結びつきが慣習化し、固定化された（怒りの）表現として確立したと考えられると述べている。

3. 調査概要

3.1 「嫌」の感情分類

「嫌」は、「好」のそれと根本的に相反する感情である。「嫌」という用語の代わりに「厭」もしくは「憎」などの用語が使われる場合もある。即ち「好」が人や物事に近づき、包容する感情であるとする、と「嫌」はそれを遠ざけ、対立する感情であるため、人の期待に満たしていない結果に対する不満や不愉快、他人に対する焼もちや憎しみなどの様々な下位範疇が考えられる。

また感情分類において中村明（1979）は「恥」を基本感情として扱ったのに対して、韓国の感情分類を行なった金香淑（2003）は「怖」の感情を積極的な怖・消極的な怖と分け、「恥」と「罪悪感」を消極的な怖の中で取り挙げている。しかし、期待・予想外れの状況や身辺に危害を加えられそうな際に感じる「驚」と、自分の失敗もしくは他人に向かう対面などにかかわる「恥」とは判然とした相異の感情であると思われる。つまり、「恥」とは単に「恥ずかしく思う心」だけでなく、「名誉を重んずること、名を惜しむ心、好ましくない状況で恥ずかしいと思う気持ち」なども表す感情である。そのため、日韓の感情の慣用表現を比較するためには「恥ずかしさ、気まずさ、面目や対面などにかかわる嫌な気持ち」をも「嫌」の下位範疇として分類するのが有効であると思う。

そこで本稿では「嫌」の下位範疇として「不満/不機嫌・軽蔑・憎しみ・恥ずかしさ/気まずさ・面目/対面」などを設け、それらを表している日韓の慣用表現に対して考察することにする。

3.2 調査資料と調査方法⁸⁾

小説類や慣用句関連の辞書などの資料文献から収集された75個の用例を日本語母語話者のチェックを受けながら「嫌」の下位範疇別に分類する。分類された用例は再び日

7) 馬場典子（2002）「腹が立つの動機付けに関する一考察」『言葉と文化』第3号 名古屋大学大学院・国際言語文化研究科

8) 本稿の「3.2 調査資料と調査方法」の節は、日韓両国語の「喜」の感情表現について考察した宋誓天（2009）と同じ研究方法を採用していることを予めお断りしておく。

韓両国語で共通に見られる表現（以下、共通表現）とある一方しかない表現（以下、固有表現）に分け、本稿の4節でそれらの特徴や相違点などを考察する。

その結果を踏まえながら、5節ではアンケートを用い日本語の「嫌」の感情表現に対する韓国人日本語学習者の認知実態を調べる。調査の対象は日本語母語話者72名（以下、J）と韓国人日本語学習者180名（以下、K）で詳細は表1のようである。因みにアンケート調査において日本語学習レベルにそった分析をもねらったため、Kは初級学習者（ka）と中級学習者（kb）が90名ずつで構成されている。また、アンケートの項目には日韓両国語から七つの固有表現が提示され、それらに対し「喜・好・怒・哀・驚・嫌」のうち、それぞれの意味であると思われる一つの感情を選ぶ仕組みとなっている。アンケートの項目には相手国の感情表現と共に直訳された自国語も提示されている。

表1 被験者の構成

日本語母語話者 (J)	大学生	39名	72名
	一般人	33名	
韓国人日本語学習者 (K)	初級学習者 (ka)	90名	180名
	中級学習者 (kb)	90名	

4. 「嫌」の感情分類と調査結果

4. 1 不満／不機嫌

不満や不機嫌の感情は、先ず表情の変化が分かりやすく、その表情は「怒」の場合と重なるところが少なくない。ここで挙げられる「不満・不機嫌」の感情表現は日本語が21個、韓国語が16個で、そのうち両国の共通表現は4個である。

- (2) ① 眉間にしわを寄せる = 미간을 찌푸리다
 ② 顔色を変える = 얼굴색을 바꾸다
 ③ 口を尖らせる = 입을 삐죽거리다
- (3-j) ① 口元を歪める ② へそを曲げる
 ③ つむじを曲げる ④ 冠を曲げる
- (3-k) ⑤ 입이 석자나 나오다 (口が三尺も出る)
 ⑥ 오만상 찌푸리다 (五万面相をしかめる)
 ⑦ 소나기 맞은 중의 상 (俄雨に降られた僧の顔つき)

- ⑧ 우거지상하다 (大根の下葉の面相をする)
- ⑨ 뱀이 꼬이다 (腸が捻じられる)
- ⑩ 심사가 뒤틀리다 (心思がねじられる)

例 (2) の③の「口を尖らせる」のは、不満を感じる際に表れる表情で「怒」の感情表現では見られないものである。口を用いている (3-k) の⑤の「입이 석자나 나오다 (口が三尺も出る)」は、口を尖らしている様子を誇張したものである。また、顔全体の表情に対しては日本語より韓国語の方が多様な表現が見られる。⑥の「오만상 (五万面相)」とは、五万数でなく苦きった表情を、⑦は、いき나りの雨に降られ不満そうな顔をするを意味する。⑧の「우거지 (大根の下葉)」とは「天日に干してくちゃくちゃになった白菜の下葉」をいう。金香淑 (2003: 175) は、不満・不機嫌でしかめた顔を「우거지 (大根の下葉)」に譬えられることに対し、「食生活で白菜を副食材料として使っている韓国文化による比喩である。9)」と説明している。

また、不満・不機嫌の感情を表す点において日本語の慣用表現が、へそ、つむじ、冠などが「曲げる」と表しているのに比べ (②～④)、韓国語の場合は뱀 (腸) や심사 (心思) などが「捻る」と表現する (⑨～⑩)。特に、日本語の「つむじ」と「冠」は他の感情表現では全く使われていない語句であり、韓国語の「배꼽 (へそ)」が「喜」だけを表すに対し、日本語の「へそ」は「喜 (笑い)」と「嫌 (不満・不機嫌)」の両方で使われる。

- (4-j) ① 虫酸が走る ② 苦虫を嘔み潰したよう
- ③ 煮ても焼いても食えぬ ④ へどが出る
- ⑤ 歯が浮く
- (4-k) ⑥ 입에서 신물이 난다 (口から虫酸が出る)
- ⑦ 입맛이 뚝다 (口当たりが渋い)
- ⑧ 뚝감 씹은 얼굴 (渋柿を噛んだ顔)
- ⑨ 밥맛/입맛이 떨어지다 (ご飯の味/口当たりが落ちる)

不満・不機嫌の感情は「味や食欲」などで表される共通点が見られる。これは、不満・不機嫌な感情が体の神経や臓器などにも影響を与えるため、実際、不満・不機嫌な原因になる対象を思い出すことだけでへどを出そうになったり食欲が減退する場合がある。(4-j)の⑤の「歯が浮く」とは、酸っぱいものなどを食べて歯が浮き上がるように感じることから、不快な音を聞いたりして気持ち悪く感ずることを表す。

9) 金香淑 (2003) 『韓國語 感情表現 慣用語 研究』韓國文化社 p.175

- (5) ① 舌打ちをする = 혀를 차다
 ② 神経に障る = 신경에 거슬리다
- (6-j) ① 舌を鳴らす ② 胸糞が悪い
 ③ 腹が膨れる ④ 虫の居場所が悪い ⑤ 虫が好かない
 ⑥ 気を悪くする ⑦ 気に食わない
- (6-k) · 눈에 거슬리다 (目にさからう)

上記の(5)の①の場合、日本語の場合は不満や軽蔑の感情を表すが、韓国語の場合は不満や、同情、安堵などの感情にも使えるものである。(6-j)の②の「胸糞」とは胸を卑しめていう語句で、この場合気持や感情を「胸」で表したものであると考えられる。一方、(6-j)の③の「腹が膨れる」は、満腹を表す場合もあるため「満足」の感情であろうと思いがちであるが、ここでは「言いたい事を言わないために不満がたまって気分が悪い」という意味で使われる。

④と⑤の「虫」は、人間の体内にいと考えられている虫が動き出して、「ちょっとしたことにも機嫌を損ねやすい状態」になったり、「なんとなく好感がもてない」感情になることを意味する。日本語に表れる「虫」については宋誓天(2007)10)で、精神が腹の中に在るという考えに触れたのでここでは繰り返さない。

4. 2 軽蔑

軽蔑するとは、人を愛さないことではあるが、ことに自己がはるかに優れていると感じ、好んで尊大な態度をとることである。軽蔑は敵をやっつけ、その敗北を楽しむためにわれわれを刺戟して敵との接触を求めさせる憎しみのようなダイナミックな感情ではない¹¹⁾。そこで本稿では、人に対し冷淡や無視、軽視する気持などを「軽蔑」と言い、それらを表している日韓の慣用表現について考察することにする。ここで取り挙げる日本語は16個、韓国語は14個で、そのうち日韓共通の慣用表現は3個である。

- (7) · 眼中にない = 안중에 없다
 · 目もくれない = 눈도 주지 않다

10) 宋誓天(2007)「怒の感情表現に関する日韓両国語の認知分析」『日本文学研究』第42号
 梅光学院大学日本文学会

11) Jean Maisonneuve. 1941. LES SENTIMENTS:Universitaires de France
 (山田悠紀男訳(1955)『感情』白水社) p.105

・見向きもしない=눈길도 주지 않다

- (8-j) ① 白い目で見る ② 尻目にかける
 ③ 鼻／鼻先で笑う ④ 鼻であしらう
 ⑤ 鼻にひっかけない ⑥ 耳を潰す

- (8-k) ⑦ 눈 아래 두다 (目の下に置く)
 ⑧ 콧웃음을 치다 (鼻笑いを打つ)
 ⑨ 콧방귀를 꺾다(鼻の屁をひる)
 ⑩ 귓등으로 듣다 (耳殻で聞く)
 ⑪ 귓등으로 흘리다 (耳殻で流す)
 ⑫ 귓등으로도 안듣다 (耳殻でも聞かない)

軽蔑の感情を「目、鼻、耳」で表すのは日韓共通である。そのうち、目や耳は「関心」を表す表現によく用いられる身体語彙であるが、(8-j)の①の「白い目」は、「冷淡な目つき」を意味し、韓国語の「目」には見当たらないものである。しかし鼻は関心とは関係なく、人間の自尊心や傲慢などを象徴する身体部位である。

鼻は眼の中央に位して顔の品位を作るのに与つて力がある。あぐらを書いた鼻は低くて上品でない。高いのが上等と思はれたから、自慢することを鼻にかけるといひ、鼻を高くするといふ。少し得意になれば鼻をうごめかす威張る人は鼻の先で人をあしらふことがある。この私が杯と鼻を指すのを見ても、個人は或意味に於て鼻を以て代表されるのである。昔は自分のことを鼻様とも言つた。12)

例(8-k)の「귓등(耳殻)」とは、軟骨とそれをおおう皮膚から成り、集音器の役を果たす外耳の最外部である。⑩は日本語の「耳を潰す」と同義で、⑪は「聞き流す」ことを、⑫は「ちっとも関心を見せず、聞こうともしない」という意味で使える。

- (9-j) ① 屁とも思わない ② 歯牙にもかけない
 ③ 人を食う ④ 取るに足りない
 ⑤ 高をくくる ⑥ 外方を向く

- (9-k) ⑦ 티끌만큼도 안 여긴다 (塵とも思わない)

12) 芳賀矢一(1911)「身体に関する色々の言廻し」『学生』1月号 富山房 p.38

- ⑧ 개 짖는 소리만큼도 안 여긴다 (犬の吠え声とも思わない)
 ⑨ 발가락 사이의 티눈만큼도 안 여긴다
 (足指の魚の目とも思わない)

上記の例(9)は日韓それぞれの固有表現を取り上げたものである。(9-j)と(9-k)は、いずれも無視、軽視する感情を表す表現である。韓国語では「塵、犬の吠え声、魚の目」など、あまり大したものではないことに用い、それよりも大したことと思わないという述語に結びつく形であるが、日本語のほうはそれより多様な表現を使っている。②の「歯牙」は、口の端から転じて「言葉」を意味し、その全体は「問題としない」という慣用的な意味を持つ。③は「人を馬鹿にして、人とも思わない態度をとる」ことを、④は「取り挙げ上げるだけの価値はない」ことを表す。また⑤は高が知れたことだと「侮る」感情が含まれたもので、⑥はよそに目を向けることから協調せず無視する態度を表すものである。

(10-j) · 嘴が黄色い

(10-k) · 머리/이마에 피도 안 마르다 (頭/おでこに血も乾かない)

一方、上記の(10)は年若く経験が足りないことを表す表現である。日本語では嘴が黄色である雛に、韓国語では生まれたばかりの新生児に譬えた表現であるが、両方とも未熟な人を無視、軽視する場合使われる表現である。

4. 3 憎しみ

憎しみの本質は悪の権化と見做す存在に打撃を与えようと欲することである¹³⁾。憎しみは、憎しみの対象となる人や物事に対する個人的な反感や敵意などの感情で、潜在的に攻撃性も含まれている。そこで本稿では、人に対する嫉妬や嫉視、敵視などの感情を中心として「憎しみ」を表す日韓の慣用表現を比較したいと思う。ここで取り挙げる日本語は5個、韓国語は7個で、そのうち日韓共通の慣用表現は2個である。

(11-j) · 焼もちを焼く

(11-k) ① 눈꼴이 시다 (目つきが酸っぱい)

② 눈꼴이 사납다 (目つきがたけだけしい)

③ 배가 아프다 (腹が痛い)

人に対する憎しみには嫉妬や嫉視がある。日本語の場合は、嫉妬する意の「焼く」に餅

13) Jean Maisonneuve著、山田悠紀男訳 (1955) 前掲書 p.105

を添えてできた語を使っているが、韓国語の嫉妬や嫉視には例(11-k)のように「目つき」が用いられる。①と②のはいずれも「目に余って、見るだけでも気持が悪くなる」という憎しみを表わすものである。(11-k)の③の「배가 아프다(腹が痛い)」は、嫉妬・嫉視を表す韓国語の固有表現で、特に、人の出世や金儲けなど、他人のことの成り行きがうまくいくことをねたま際よく使われる。日本語の場合「腹が痛い」は身体的な痛みの「腹痛」を意味するため、慣用表現とは言えない。

また、日本語には「腹が痛む」という慣用表現があるが、これは「自腹を切る」を言いかえたもので、「身銭を切る、自分のお金を出す」の意味である。つまり、日本語の「腹」の概念には、身体部位を指す他に「心に考えていること、意中、心底」や「気力、胆力、度胸」などが含まれているということは韓国の「배(腹)」と同じであるが、韓国語の「배(腹)」には「怒や癢」などの感情は入っていないと考えられる。

- (12) ① 目の上のこぶ = 눈의 혹
 ② 指を差す = 손가락질을 하다

- (13-j) ① 目の敵にする ② 悪態を突く

- (13-k) ③ 눈의 가지 (目のとげ) ④ 눈 밖에나다 (目の外へ外れる)

「目」は、体の表面の中でもっとも敏感で弱いところである。そのような「目」に対し「こぶや敵、とげ」などを結びつけたことは、とかく気にさわるものやじゃまになるものを強調するためであると思われる。特に(13-j)の①の「目の敵にする」は、見るたびに憎く思うことやその相手を表す。また、(13-k)の④のように「信任を失い憎まれる」のような慣用表現は日本語には見当たらないものである。

4. 4 恥ずかしさ／気まずさ

「恥ずかしさ・気まずさ」は、主に自分の欠陥や弱点、失敗などの自己の欠点に由来する「恥」を言う。ここで取り挙げる日本語は12個、韓国語は12個で、そのうち日韓共通の慣用表現は3個である。

- (14) ① 頭をかく = 머리를 긁다
 ② 舌を出す = 혀를 내다
 ③ 身の置き場がない = 몸 둘 바를 모르다

- (15-j) ① 爪を食う ② 穴があったら入りたい

- ③ 恥を見す ④ 恥をさらす
⑤ 恥の上塗り ⑥ 恥を知る

- (15-k) ⑦ 손톱을 깨물다 (爪を噛む)
 ⑧ 쥐구멍을 찾다 (鼠穴を探す)
 ⑨ 입을 가리다 (口を覆う)

上記の (14) と (15) の例は主に恥ずかしがる様子を表すもので、(14) の①の場合は韓国語で「뒤통수를 긁다(後頭をかく)」としてよく使われる。(15)の①と⑦は「爪」を用いたもので極めて類似し、②と⑧は、あまりの恥ずかしさで「穴」にでも隠れたいという感情である。また⑨は、言葉や物言いについての失敗や間違いなどを起した後の行動で、自分の恥ずかしさを隠したいという気まずい感情を表しているところは「穴」の場合と同じであろう。

一方、日本語表現の (15-j) を見てみると、「恥」にかかわる表現がより多様であり、その使い分けも多いということが分かる。④の「恥をさらす」は、たくさんの人前で恥をかき、自分の不名誉を大勢の人に知られること、⑤の「恥の上塗り」は、すでに恥をかいている上に、さらに恥をかくことを表す。

- (16-j) ① 顔に紅葉を散らす ② 顔から火が出る
 ③ 汗顔の至り

- (16-k) ④ 얼굴을 붉히다 (顔を赤らめる)
 ⑤ 얼굴이 홍당무가 되다 (顔が人参になる)
 ⑥ 낮이 뜨겁다 (顔が熱い)
 ⑦ 얼굴이 화끈거리다 (顔が火照る)
 ⑧ 귀뿌리가 빨개지다 (耳元が赤くなる)
 ⑨ 얼굴이 간지럽다 (顔がこそばゆい)

恥ずかしく気まずい感情における日韓両国語は「赤面と発熱」のところで一致するものが多い。恥ずかしさで顔が赤くなることを日本語は「紅葉 (①)」で、韓国語は「人参 (⑤)」に譬えられているが、両方とも「赤色」であることは同じである。また日本語には「顔から火が出る」という表現を使い赤面の上、火照ることを表している。これに対応する韓国語は⑥と⑦である。しかし、恥ずかしさによる汗顔を用いたのは日本語だけであり、反面、⑧と⑨のように耳元を用いたり顔の痒みなどで恥ずかしい感情を表しているのは韓国語だけである。

4. 5 面目／体面

「体面」は、他人や世間に対する恥ずかしさや面目を言う。人は自分の体面が保たなくなる場合も恥を感じる。そこで本稿では、日韓の「体面」にかかわる慣用表現を考察して見ることにする。ここで取り挙げる日本語は12個、韓国語は9個で、そのうち日韓共通の慣用表現は 5個が見られる。

- (17) ① 顔に泥を塗る = 얼굴에 흙탕칠을 하다
 ② 顔を汚す = 얼굴을 더럽히다
 ③ 顔が潰れる = 얼굴이 몽개지다
- (18—j) · 味噌をつける
- (18—k) ① 얼굴에 먹칠을 하다 (顔に墨塗りをする)
 ② 얼굴에 똥칠을 하다 (顔に糞塗りをする)
 ③ 얼굴이 깎이다 (顔が削られる)

体のうち「顔」は頭部の前面という身体構造とともに、顔の表情で感情が作られるということで、体面や名誉を表す部位として捉えられる。そのため日本語の「顔が立つ」とは韓国語で「체면이 서다(体面が立つ)」と同義であるのである。このような人の「顔」が、泥や味噌もしくは墨や糞などで汚れるということは身体部位としての顔でなく、自分の体面や名誉などに傷つけることを意味する。また「顔」が、潰れたり削られたりするなどの直接的な損傷で表れることも体面に関わるものである。

- (19) ① 合わせる顔がない = 볼 낮이 없다
 ② 面目が立たない = 면목이 서지 않다
- (20—j) ① 顔向けができない ② 面目丸つぶれ
 ③ 面子(メンツ)をつぶす ④ 肩身が狭い
 ⑤ 肩身が窄る ⑥ 極まりが悪い
- (20—k) · 얼굴을 들수가 없다 (顔が上げられない)

体面を表す日本語は、「顔」の他に、面子^{メンツ}や肩身、極まりなどで、「顔や面目」ほどしかない韓国語より多様である。特に「面子^{メンツ}」は、面目や体面を意味する中国語である。また、⑤の「肩身が窄る」は④の「肩身が狭い」と同義で使われ、⑥の「極まりが悪い」とは、他に対して面目が立たず恥ずかしいという感情を表すものである。

以上、日韓両国語において「嫌」の感情表現を「不満・不機嫌・軽蔑・憎しみ・恥ずかしさ／気まずさ・面目／体面」などの下位範疇別に分けて探ってみた。「嫌」の感

情表現は総107個が見られた。そのうち身体語彙が使われた慣用表現は75個で、これは全体の「嫌」の70%に達する結果となった。詳細は表2のようである。

表2

嫌の感情	共通の慣用表現		日本固有の慣用表現		韓国固有の慣用表現	
	合計	身体語彙： 他	合計	身体語彙： 他	合計	身体語彙： 他
不満／不機嫌	4	4：0	17	9：8	12	8：4
軽蔑	3	2：1	13	7：6	11	9：2
憎し	2	2：0	3	2：1	5	5：0
恥ずかしさ...	3	3：0	9	4：5	9	8：1
面目／体面	5	4：1	7	3：4	4	4：0
総合：107	17	15：2	49	25：24	41	34：7

5. アンケート調査と分析結果

ここでは実際の日本語慣用表現に対する理解度を調査し、日韓両国の慣用表現が異なる言語文化を持つ人には実際にどう認知されがちであるのか、その認知実態を調査・分析することにする。

実際のアンケート調査では、日韓両国語において共通表現3つずつと固有表現7つずつ、合わせて20個を調べたが、本稿では両国の固有表現14個だけに限って述べることにする。各々の表の網掛け部分は感情項目別の正解率を表し、太字で下線が引かれたところはその固有表現においてもっとも回答数が多い場合である。因みにアンケートには被験者により著者による韓国語や日本語への訳が共に示されているため、本稿では括弧の中で表記しておく。

5.1 両国語の固有表現に対するJとKの認知調査

まず、Jの認知調査のため取りあげられた韓国の‘嫌’の感情表現は次のようである。

- 뻘이 꼬이다 (腸が捻じられる) 14
- 콧방귀를 꺾다 (鼻の屁をひる)
- 입이 석 자나 나오다 (口が三尺も出る)
- 배가 아프다 (腹が痛い)
- 눈 아래 두다 (目の下に置く)
- 귓등으로 듣다 (耳殻で聞く)
- 콧웃음을 치다 (鼻笑いを打つ) 15

14) 「뻘이 꼬이다」は、「배알이 풀리다」とも言う。金香淑 (2003:182)

15) 「콧웃음을 치다(鼻笑いを打つ)」とは、日本語の慣用表現である「鼻で笑う」と使い方が同様であるため、日韓両国の共通表現で扱っても良いはずであるが、本稿では「韓国の固有表現」に入れることにした。

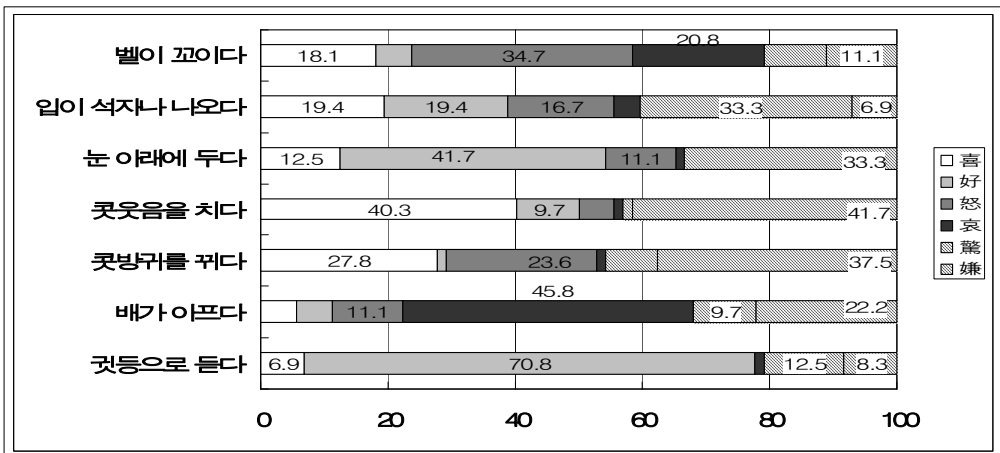
Jの平均正解率は23%で、これは「喜、好、怒、哀、驚、嫌」6つの感情項目でもっとも低い数値である。そのうち「콧웃음을 치다 (鼻笑いを打つ)、콧방귀를 꾸다 (鼻の屁をひる)」は‘嫌’の正解率が40%前後で、平均よりは高いほうであるが、いずれも‘喜’との回答数の差は若干にすぎない。しかし、‘あまり注意せず、無視する’という意味で使われる「눈 아래 두다 (目の下に置く)、귓등으로 듣다 (耳殻で聞く)」は、いずれも‘好’の回答数が多く、嫉妬や嫉みの感情を表す「배가 아프다 (腹が痛い)」の場合は45.8%が‘哀’の感情であろうと答えた。また、‘への字に曲げた唇を前に出している顔つきを誇張して表している「입이 석 자나 나오다 (口が三尺も出る)」では‘驚’の答えが多く見られた。

表 3 韓国の固有表現に対する J の回答数の比較 (単位：個(%))

‘嫌’の固有表現	J の回答数					
	喜	好	怒	哀	驚	嫌
벨이 꼬이다	13(18.1)	4(5.6)	<u>25(34.7)</u>	15(20.8)	7(9.7)	8(11.1)
입이 석자나 나오다	14(19.4)	14(19.4)	12(16.7)	3 (4.2)	<u>24(33.3)</u>	5(6.9)
눈 아래에 두다	9(12.5)	<u>30(41.7)</u>	8(11.1)	1(1.4)	0(0.0)	24(33.3)
콧웃음을 치다	29(40.3)	7(9.7)	4(5.6)	1(1.4)	1(1.4)	<u>30(41.7)</u>
콧방귀를 꾸다	20(27.8)	1(1.4)	17(23.6)	1(1.4)	6(8.3)	<u>27(37.5)</u>
배가 아프다	4(5.6)	4(5.6)	8(11.1)	<u>33(45.8)</u>	7(9.7)	16(22.2)
귓등으로 듣다	5(6.9)	<u>51(70.8)</u>	0(0.0)	1(1.4)	9(12.5)	6(8.3)
合計 (平均)	94 (18.7)	111 (22.0)	74 (14.7)	55 (10.9)	54 (10.7)	<u>116</u> (23.0)

注) J の回答数の合計は504個(100%)である。

図 1 韓国の固有表現に対する J の回答数の割合 (単位：%)



次は‘嫌’を表す日本の固有表現に対するKの認知調査である。Kの平均正解率は38%で、これはJとは逆に6つの感情項目でもっとも高い数値である。

- ・ 虫の居場所が悪い
- ・ 煮ても焼いても食べぬ
- ・ 歯が浮く
- ・ 白い目で見ると
- ・ へそを曲げる
- ・ 人を食う
- ・ つむじを曲げる

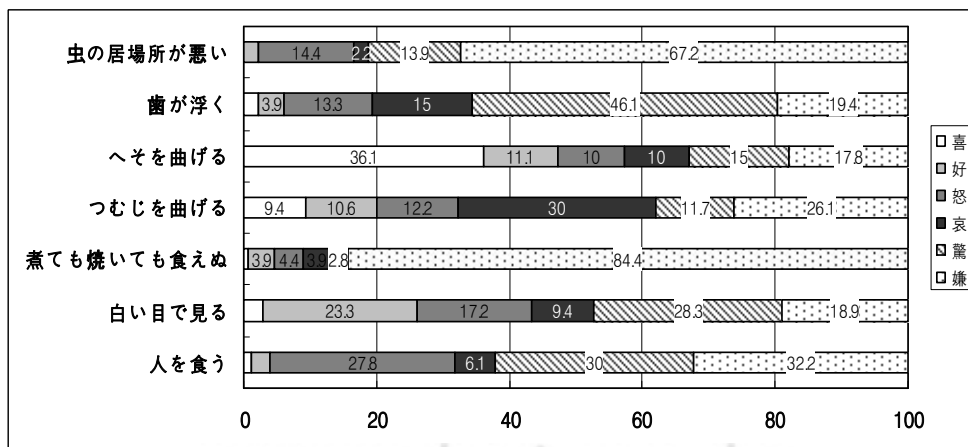
具体的に‘嫌’の正解率がより高かったのは「虫の居場所が悪い、煮ても焼いても食べぬ、人を食う」の3つである。特に「煮ても焼いても食べぬ」の正解率は日本語の全固有表現のうちもっとも高い84.4%に至る。

表4 日本の固有表現に対するKの回答数の比較 (単位：個(%))

‘嫌’の固有表現	Kの回答数					
	喜	好	怒	哀	驚	嫌
虫の居場所が悪い	0(0.0)	4(2.2)	26(14.4)	4(2.2)	25(13.9)	121(67.2)
歯が浮く	4(2.2)	7(3.9)	24(13.3)	27(15.0)	83(46.1)	35(19.4)
へそを曲げる	65(36.1)	20(11.1)	18(10.0)	18(10.0)	27(15.0)	32(17.8)
つむじを曲げる	17(9.4)	19(10.6)	22(12.2)	54(30.0)	21(11.7)	47(26.1)
煮ても焼いても食べぬ	1(0.6)	7(3.9)	8(4.4)	7(3.9)	5(2.8)	152(84.4)
白い目で見ると	5(2.8)	42(23.3)	31(17.2)	17(9.4)	51(28.3)	34(18.9)
人を食う	2(1.1)	5(2.8)	50(27.8)	11(6.1)	54(30.0)	58(32.2)
合計 (平均)	94 (7.5)	104 (8.3)	179 (14.2)	138 (11.0)	266 (21.1)	479 (38.0)

注)Kの回答数の合計は1260個 (100%)である。

図2 日本の固有表現に対するKの回答数の割合 (単位：%)



「歯が浮く、白い目で見える」はそれぞれ46.1%と28.3%で、「驚」の答えが多く、韓国の表現にはほとんど見られない「つむじ」が用いられた「つむじを曲げる」という慣用表現の答えは「哀(30%)」と「嫌(26.1%)」に分かれた。また、Kの36.1%が「喜」であろうと答えた「へそを曲げる」は、「へそ」が用いられた多くの韓国語の慣用表現が「喜」の感情¹⁶⁾を表しているのが一つの原因となり得ると考えられる。

5. 2 日本語の固有表現に対するkaとkbの認知調査

「嫌」を表す日本固有の慣用表現においては、kaの正解率がkbを上回っているという特徴がある。kbの場合、「へそを曲げる、つむじを曲げる、人を食う」という表現の回答数がそれぞれ「喜(55.6%)、哀(34.4%)、怒(35.6%)」のほうに片寄っているのに対して、kaの回答数は全て「嫌」の答えが多く、その正解率も31.1%、72.2%、35.6%に達した。また「歯が浮く」の場合はkaとkb、両方とも「驚」の回答数が多いが、「嫌」の回答数だけを比較してみると、やはりka(22.2%)のほうがkb(16.7%)より正解率が高い。

「嫌」の範疇でもっとも正解率が高いのは、kaが72.2%、kbが96.7%となった「煮ても焼いても食えぬ」である。また「虫の居場所が悪い」は、その使い方において「怒」と「嫌」との境界が明快に分けられないため、両方を合わせると80%を超える正解率を占める。しかし「白い目で見える」に対しては、kaが「好(31.1%)」、kbが「驚(36.7%)」と答えた数が多く、「嫌」は両方とも18.9%にしか過ぎない。言い換えれば、「冷淡や憎しみ」などがこもった日本語の「白い目」に対し、Kの共感を引き起こすことは容易でないと言える。

表5 日本の固有表現に対するkaとkbの回答数の比較 (単位:個(%))

‘嫌’の固有表現		kaとkbの回答数					
		喜	好	怒	哀	驚	嫌
虫の居場所が悪い	ka	0(0.0)	4(4.4)	10(11.1)	4(4.4)	9(10.0)	63(70.0)
	kb	0(0.0)	0(0.0)	16(17.8)	0(0.0)	16(17.8)	58(64.4)
歯が浮く	ka	2(2.2)	0(0.0)	12(13.3)	15(16.7)	41(45.6)	20(22.2)
	kb	2(2.2)	7(7.8)	12(13.3)	12(13.3)	42(46.7)	15(16.7)
へそを曲げる	ka	15(16.7)	11(12.2)	10(11.1)	6(6.7)	20(22.2)	28(31.1)
	kb	50(55.6)	9(10.0)	8(8.9)	12(13.3)	7(7.8)	4(4.4)
つむじを曲げる	ka	1(1.1)	7(7.8)	5(5.6)	7(7.8)	5(5.6)	65(72.2)
	kb	16(17.8)	15(16.7)	10(11.1)	31(34.4)	4(4.4)	14(15.6)
煮ても焼いても食えぬ	ka	1(1.1)	7(7.8)	5(5.6)	7(7.8)	5(5.6)	65(72.2)
	kb	0(0.0)	0(0.0)	3(3.3)	0(0.0)	0(0.0)	87(96.7)

16) 宋誓天(2009)「日韓国語の‘喜’の感情表現に関する対照分析」『日本學研究』第26輯 檀國大學校 日本研究所 pp.517-536

白い目で見ると	ka	3(3.3)	14(15.6)	16(17.8)	7(7.8)	33(36.7)	17(18.9)
	kb	2(2.2)	28(31.1)	15(16.7)	10(11.1)	18(20.0)	17(18.9)
人を食う	ka	1(1.1)	3(3.3)	18(20.0)	10(11.1)	26(28.9)	32(35.6)
	kb	1(1.1)	2(2.2)	32(35.6)	1(1.1)	28(31.1)	26(28.9)
合計 (平均)	ka	23 (3.7)	43 (6.8)	83 (13.2)	72 (11.4)	151 (24.0)	258 (41.0)
	kb	71 (11.3)	61 (9.7)	96 (15.2)	66 (10.5)	115 (18.3)	221 (35.1)

図3 日本の固有表現に対するkaの回答数の割合 (単位: %)

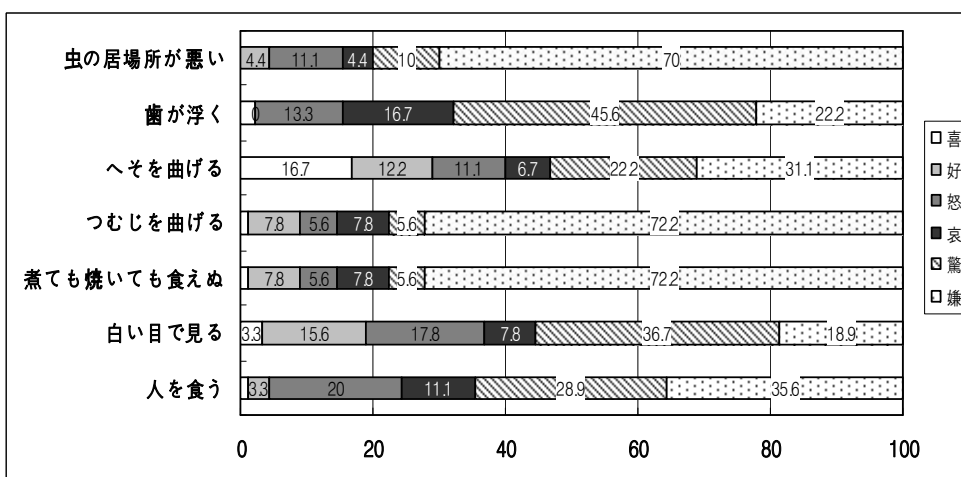
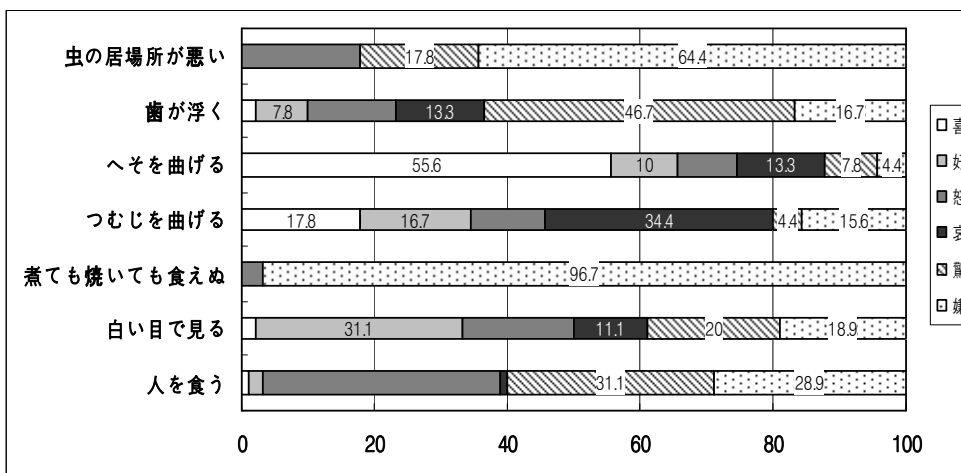


図4 日本の固有表現に対するkbの回答数の割合 (単位: %)



5. まとめ

日韓両国語の対照分析において「嫌」の下位範疇として「不満/不機嫌・軽蔑・憎しみ・恥ずかしさ/気まずさ・面目/対面」などを設けた。これらの「嫌」の感情は口や眉などの顔の表情でよく伝わる。また、基本感情のうち味や食欲の低下などで表される感情は「嫌」のみで、虫酸や苦く渋い味で表れるのは日韓で一致するものである。しかし、しかめた顔の表情を大根の下葉や雨に降られた顔つきに譬えられるのは韓国語のみで、他の感情表現では全く使われなかった「つむじ・冠」などが用いられるのは日本語のみの特徴であると言える。

嫌の下位範疇である「軽蔑」の感情は、その対象を無視・軽視する態度が目や鼻で表れる場合が多い。しかし、冷淡な目つきを「白い目」で表現するものは日本語のみで、韓国語には「耳殻」を用いた表現がよく見当たる。日韓両国語には、年若く経験が足りず未熟な人を無視・軽視する慣用表現があるが、日本語では嘴が黄色である雛に、韓国語では生まれたばかりの新生児に譬えた表現であることが異なる。特に「腹」を用いて嫉妬や嫉視の感情を表すことは韓国語のみである。ここで、日韓両国語における「腹」の概念には、心の中で考えていること、意中、心底や気力、胆力、度胸などが含まれているが、韓国語の「배(腹)」には日本語の場合のような「怒や癢」などの感情が入っていないと考えられる。

予想外れの状況で感じられる「恥ずかしさ/気まずさ・面目/対面」などに関わる感情は頭をかいたり爪を噛んだり顔が赤くなったりするなどの実際の行動や身体変化などで表れる場合が多い。これらの感情表現は韓国語より日本語のほうがより多様で、その使い分けも多い反面、韓国語では「恥」という語句に直接に結ぶ付いたものがあまり見当たらない。また「体面」に関わる慣用表現においては両国語で「顔」がよく使われるが、「顔や面目」ほどでしか使われない韓国語より日本語の場合は、「顔」の他に、面子や肩身、極まりなどの多様な語句が使われる。

アンケートの調査では日韓両国語の実際の例に対するJとK、kaとkbの認知実態を調べてみた。まず、韓国語の固有表現に対するJの答えは「벨이 꼬이다(怒:34.7%)¹⁷⁾、입이 석자나 나오다(驚:33.3%)、눈 아래에 두다(好:41.7%)、콧웃음을 치다(嫌:41.7%)、콧방귀를 꾸다(嫌:37.5%)、배가 아프다(哀:45.8%)、꿇등으로 들다(好:70.8%)」で、その平均正解率は23%である。これに対し、日本語の固有表現に対するKの答えは「虫の居場所が悪い(嫌:67.2%)、歯が浮く(驚:46.1%)、へそを曲げる(喜:36.1%)、つむじを曲げる(哀:30%)、煮ても焼いても食えぬ(嫌:84.4%)、白い目で見ると見る(好:23.3%)、人を食う(嫌:32.2%)」で、その平均正解率は38%である。

17) 括弧の中の感情と数字は各々の固有表現において正解率が最も高かったものを表す。

人間の基本感情を表す場合であっても、それぞれの言語素材や比喻、譬えられる語彙や対象の色などによって、その感情の意味がうまく伝わらなくなる場合も十分あり得ることが分かる。特に、Kの正解率を k_a と k_b に分けてみると「虫の居場所が悪い(70:64.4)18)、歯が浮く (22.2:16.7)、へそを曲げる (31.1:4.4)、つむじを曲げる (72.2:96.7)、煮ても焼いても食べぬ (72.2:96.7)、白い目で見ると (18.9:18.9)、人を食う (35.6:28.9)」となる。このように k_a の正解率が k_b を上回っている調査結果から感情を表す慣用表現においての認知実態が必ずしも日本語の学習段階に沿ってはいないということが明らかになった。これは感情表現に関する学習能力が日本語学習段階が上がるにつれ自然に上がるものではないため、初級レベルからも体系的な学習が必要であることを示唆する。

本稿は人間の基本感情に目を向け、日本語母語話者と韓国人学習者の感情表現に対する認知実態が提示されたところに意義があると思われる。互いの異なる言語文化に基づいた本研究が、今まで看過されてきた韓国人学習者の日本語教育における感情表現研究に、何らかの貢献ができれば幸いである。

18) 括弧の中の数字は「嫌」の感情項目における正解率 ($k_a : k_b$) である。

【例文出典】

《日本語の小説類》

『蒲団』(田山花袋,1995,新潮社) 『春』(島崎藤村,2004,新潮社) 『坊ちゃん』(夏目漱石,2003,集英社) 『海と毒薬』(遠藤周作,1999,新潮社) 『N・P』(吉本ばなな,1990,角川書店) 『ブイヨンの妻』(太宰治,1985,新潮社) 『千羽鶴』(川端康成,1983,新潮社) 『女たちのジハード』(篠田節子,1997,新潮社) 『ロングバケーション』(北川悦使子,1996,角川書店) 『秘密』(東野圭吾,1999,文芸春秋)

《韓国語の翻訳書類》

『이불』(오경,1997,小花) 『봄』(노영희,1997,小花) 『도련님』(장남호,2003,시사) 『바다와 독약』(이평아,2001,카톨릭사)
『N・P』(김난주,1999,복스토리) 『뷔용의 아내』(김혜숙,2004,도서출판 흥) 『천년학』(김진욱,1999,범우사) 『여자들의 지하드①』(이정환,1999,자유문화사) 『여자들의 지하드②』(이정환,1999,자유문화사)
『롱버케이션①』(이주영,1999,한민사) 『롱버케이션②』(이주영,1999,한민사) 『비밀①』(이선희,1999,창해) 『비밀②』(이선희,1999,창해)

【参考文献】

- 김향숙 (2003) 『한국어 감정표현 관용어 연구』 한국문화사 p.175
- 문금현 (1999) 『국어의 慣用 表現 研究』 태학사
- 石田博史 (1989) 「身体語彙に関する慣用表現」 『言語』 18 大修館 p.31
- 林八龍 (2002) 『日・韓兩國語の慣用的表現の対照研究』 明治書院 pp.153-155
- 河原修一 (1999) 「日本語における感情と思考」 『国語国文』 第24号 金沢大学国語国文学会 pp.5-15
- 宋誓天 (2007) 「怒の感情表現に関する日韓兩國語の認知分析」 『日本文学研究』 第42号 梅光学院大学日本文学会 pp.1-12
- 宋誓天 (2009) 「日韓兩國語の'喜'の感情表現に関する対照分析」 『日本学研究』 第26輯 檀国大学校 日本研究所 pp.517-536
- 寺澤芳雄他 (1997) 「総合研究11 日・英慣用表現の対象研究」 『東京女子大学比較文化研究所紀要』 第58巻 東京女子大学比較文化研究所 pp.64-100
- 馬場典子 (2002) 「腹が立つの動機付けに関する一考察」 『言葉と文化』 第3号 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 pp.31-44
- 芳賀矢一 (1911) 「身体に関する色々の言廻し」 『学生』 1月号 富山房 p.38
- 星野命 (1976) 「身体語彙による表現」 『日本語講座 第四巻 日本語の語彙と表現』 大修館 pp.155-156
- 宮地裕 (1999) 『敬語・慣用句表現論』 明治書院 pp.214-341
- 和田節 (1969) 「からだことば考」 『思想の科学』 94 思想の科学社 pp.82-94
- Dylan Evans. 2001. EMOTION-A very short Introduction : Oxford University
(遠藤利彦訳 (2005) 『感情』 岩波書店)
- Jean Maisonneuve. 1941. LES SENTIMENTS:Universitaires de France
(山田悠紀男訳 (1955) 『感情』 白水社) p.105
- Kovecses, Z. 1995. Metaphor and fork understanding of anger. In Taylor, J. &R. e. Maclaury, ds. Language and the cognitive construal of the world. Berlin : Mouton de Gruyter, p.195

要 旨

本稿では、日韓両国語の「嫌」の感情表現を対照分析した上で、日本語の感情表現に対する韓国人日本語学習者の認知実態を明らかにすることを目的とする。「嫌」の下位範疇としては「不満/不機嫌・軽蔑・憎しみ・恥ずかしさ/気まずさ・面目/対面」などを設けた。分析方法としては、まず 4 節で文献から収集された 75 個の「嫌」の感情表現を下位範疇別に分類した後、日韓両国語の共通表現と固有表現に分けてそれらの特徴や相違点などを考察する。次に 5 節では両国語の固有表現に対して日本語母語話者(72名、以下J)と韓国人日本語学習者(180名、以下K)の認知実態をも調べてみる。

分析結果としては、(1)人間の基本感情のうち味や食欲の低下などで表される感情は「嫌」のみであるが、同じしかめた顔を表す際、韓国語には「大根の下葉や雨に降られた顔つき」、日本語には「つむじ・冠」などの素材が使われる特徴が見られる。(2)嫌の下位範疇である「軽蔑」の感情表現においては、冷淡な目つきを「白い目」で表現したり嘴が黄色である雛に譬えたりするものは日本語のみで、韓国語には「耳殻」を用いた表現がよく見当たり、新生児に譬えたりする表現がある。(3)「배가 아프다(腹が痛い)」は、韓国語では「嫉妬・嫉視」の感情を表す固有の慣用表現となるが、日本語ではただの身体的な痛みを表し、その慣用的な意味を失ってしまう。ここで韓国語の「배(腹)」には日本語の場合のような「怒や癪」などの感情が入っていないと考えられる。(4)予想外れの状況で感じられる際の感情表現においては、「顔や面目」ほどでしか使われない韓国語より日本語の方がより多様で「顔や面子、肩身、極まり」などの多様な語句が使われる。

一方「嫌」の感情表現に対する認知実態を調べるアンケートでは、kaの正解率がkbを上回っている調査結果が目立つ。これは感情表現に関する学習能力が日本語学習段階が上がるにつれ自然に上がるものではないということを示唆する。

キーワード：慣用表現、「嫌」の感情、アンケート調査、固有表現、認知

투 고 : 2009. 8. 31
1차 심사 : 2009. 9. 12
2차 심사 : 2009. 9. 26